滞在先の家族は，「今日はどのルートに行くのか」「風が強くなったら無理をせずに帰って来なさい」と気にかけてくれ，棚田や畑で働く住民は「休憩していきなよー」と声をかけてくれる．ひとりで調査が続けられるのは，初めての調査の時以来，私を受け入れ，家で心配してくれているお母さんやお父さんがいればこそだ．

調査を始めてから3年のうちに，景観が大きく変わった村もあれば，あまり変わらない村もあった．目に見える変化のスピードはそれぞれであるが，その速度は予想よりも早い．今度行った時に，またいつもの光景や，顔なじみの人たちに会えるだろうか．私を迎えてくれる動物たちは健在だろうか．森は私に語りかけてくれるだろうか．

目をつぶって耳を澄ませば，西ジャワの山奥から森の声と村の音が聞こえてくる．

移動する人々との関わりから生まれた「故郷」

伊　藤　千　尋*

ザンビアの農村で調査をしながら暮らしていたとき，私は有名人になった気分だった．どこを歩いていても，近くから，遠くから私の名前を呼ぶ声がしてその先には村の人々が笑顔で手を振っている．

私が初めて調査村（ハバンバ村）に来たのは，まだ乾季で気温が穏やかな8月下旬だった．ザンビア南部州，国内でも干ばつが頻繁におこる地域として知られているところだ．私は農村の人々が生業をどのように組み合わせているか，そして特に出稼ぎ労働が村の人々の生活，とりわけ経済にどのような影響を与えているかを研究のテーマにし村に入った．これはそのときに私の心の中で生まれてきた調査村に対する「故郷」の意識の話だ．

ハバンバ村との出会い

ハバンバ村の多くの人にとって，私は「初めて見る身近な白人」であった．そのため村に入った当初は，ハバンバ村だけでなく隣村からも，私を見ようと色々な人が訪ねてきた．初めのころは，私が歩いていると挨拶や質問の嵐で，現地の言葉を話そうとする私をおもしろがったり，からかったりする人もいた．このときが初めてのアフリカ滞在だった私は，村の人々とのこうしたやりとり，視線に疲れを感じずにはいられなかった．到着して間もない頃は気づかなかったが，村の人々が，初めて見る外国人に不安や好奇心という感情を抱くことは自然のことだった．そのことに気がついてからは心が楽になり，8ヵ月

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

写真 1　調査村一帯の様子
到着した当初は雨季になっても農業ができるのかという不安を抱かせるような風景が広がっていた．

写真 2　レンガ作りを手伝うナナ

も滞在するのだからそのうち慣れていくだろうと本来の楽観的な性格を取り戻していた．

私の予想どおり，時間が経つにつれて，また彼らと日常をともにするにつれて私がいることに村の人は慣れていった．しかし，そんな中でも，初めから私との壁を感じさせない接し方をしてくれる人がいた．それは一緒に暮らしていたナナ（Nana）という女の子と，隣の家に住んでいたギレ（Gile）という少女だ．

ナナの父親は私が滞在していた村の村長で，私はその一家と一緒に暮らしていた．ナナと最初に出会ったとき，日本でも聞き覚えがあるこの名前と彼女の笑顔にとても親近感を抱いたのを覚えている．彼女は 10 人兄弟の下から 3 番目で当時は 6 歳だった．彼女はまだ幼い末の妹に母親がかかりっきりなのに不満を抱いてすねていたり，お腹がすくと機嫌が悪くなったり，怒られると泣きわめいているのにちらりと様子を伺ったり，とても正直でわがままで，感情がわかりやすく，見ていると自分の子どもの頃を思い出すかのような子だった．

ギレはナナと対照的に，8 歳という年齢にしてはとても大人びていて，私が村で一番美人だと思う少女だった．母親と長男，ギレ，そして双子の弟が 2 組いる家族だ．ギレは末の双子を背中と前にひとりずつ抱え，彼らの面倒，食事や洗濯の手伝いにいたるまで母親ひとりの家庭を支えていた．ギレ一家は私と村長一家が暮らすコンパウンドの隣に住んでいた．

私は夜になると，食事の後に外で家族と会話をしていた．会話といっても私が話すことのできる言葉はまだ限られていたので，大半は聞くことになる．そこにギレがやってきて，「*Sobane*」と言う．*Sobane* とはトンガ語で遊ぶという意味だ．なんとなく「あそぶ」という音の感覚に近いこともあって，すぐに覚え，好きな単語のひとつになっていた．彼女たちの遊びはたくさんあって，私が一番驚いたのは日本の遊びとの共通点もあったことだ．たとえば，何人かで円をつくって座り，ひとりがその外側を歌いながら歩き，ペット

ボトルや布などを誰かの後ろに落とす．落とされた人は気づいたら，外側の人を追いかけてタッチする．「ハンカチ落としでしょ?!」とこのルールを聞かされたとき，私は思わず日本語で言ってしまった．まさかアフリカでハンカチ落としをやることになるとは思っていなかった私は嬉しくなり，6 歳や 8 歳の友達と一緒になって本気で楽しんでいた．

会話をほとんどしなくても，次第にナナとギレは村の中で私が最も心を許す存在になっていた．日本にいてもとりわけ人づきあいが得意とはいえない私も，彼女たちがいたおかげで，周りの人々との関係が次第に近く感じられるようになった．

農村で暮らすこと

出稼ぎ労働の調査を始めたのは 10 月，雨が降り始める前の一年で最も暑い季節だ．初めのインタビューでハバンバ村の人々の出稼ぎ労働の経験を聞いていたので，経験者にその場所や職種，期間などを個別に質問していった．

移動に関するインタビューは思い出してもらうのも，聞きたい情報を取り出すのもなかなか大変で時間のかかる作業だった．数年の間に行った人は比較的記憶が鮮明だが，十数年前になると年代を思い出すのに，子どもの生まれた年や結婚した年などこちらが知っている情報を出して，それより後だったか，前だったかと一緒になって考えた．その時の状況を奥さんや子どもを交えてみんなで思い出した．幸いだったのは，ほとんどの人が協力的で，時間を惜しまず自らの経験を私に聞かせてくれたことだった．

「出稼ぎ労働」という言葉は，普通都市で半年や 1 年ほどの短期間働き，農村に帰ってくることを指している．インタビューの結果も確かに半数ほどは 1 年以内の事例だったが，その一方で 5 年以上都市に滞在して村に戻ってきている人々がいたのも事実だった．これをなんと呼べばいいのだろうか，と私は戸惑った．出稼ぎ労働と呼ぶには期間が長いような気がしていた．しかし同時に村に帰ってくるという彼らの意志と行為，そして現在村の成員として暮らす彼らには，「移住」という言葉も当てはまらないのではとも考えた．

さらに私が不思議だと思ったのは，「干ばつがなければ出稼ぎには行きたくない」という多くの人の言葉だった．この地域は頻繁に干ばつがおこっているため，乾季のたびに出稼ぎに行くことや，移住という選択肢も十分考えられた．しかし，返ってきたものの多くはこの回答だった．

数十年都市にいてもまた農村に帰ってくるというのはどういう意味なのか．

人々を村に繋ぎとめるものは，何か．

出稼ぎ労働のデータが集まってきても，私にはその答えがまだ見えない気がしていた．

都市での経験

調査も後半に差しかかり，帰国まであと 2ヵ月と迫った 1 月に，私は都市での調査を行なうことになった．得られた情報をまとめていくと，村の人々が最もよく行く出稼ぎ先の都市が 1 時間ほどで行ける場所であるこ

とがわかったのだ．シアボンガという湖岸にあるその都市は治安も良いため，調査助手を引き受けてくれた友達と一緒に出稼ぎに行っている人を追いかけることにした．実際に都市で彼らがどのように暮らしているかを見聞きできることはもちろんだが，村での生活に少し飽きていた私は，久々に都市に長く滞在することも楽しみのひとつであった．

シアボンガは都市というよりは町という言葉がぴったりな人口 1 万人弱の静かなところだ．カリバ湖を利用した漁業が主産業であるが，最近は観光業が栄え白人観光客や都市に住むザンビア人などが休暇でやってくるようになった．

ハバンバ村から出稼ぎに来て，現在シアボンガに滞在していたのは全部で 9 人だった．まず彼らの家を訪ね，インタビューのお願いと日程について話した．もちろん初対面なのだが，村の家族や親戚を知っている私は彼らに初めて会った気がしなかった．初めのうち彼らは私がなぜ自分たちの所に訪ねてきたのか驚いている様子だったが，私がハバンバ村に 8 月から滞在していること，調査の内容などを伝え，彼らの家族や村にいる共通の友人の話をするうちに緊張がほぐれていった．

都市での生活の様子や，現在までの職歴，シアボンガでの人との繋がりなどを聞いていると，出稼ぎ労働に行った人は村に戻る時期がなぜ曖昧なのかが少しわかってきた．彼らの間では仕事を人づてに探したり，職場で出会った人に誘われて他の都市へ移動したりということがよく起こる．都市での新しい出会いや就職の機会によって，村を出た当初想定

写真 3　シアボンガ
出稼ぎ労働者が暮らすコンパウンドからはカリバ湖が見渡せる．

していた期間よりも長くなることがあるのだ．このことから，私は都市で過ごす期間が 1 年であろうと数年になろうとも，彼らにとっては出稼ぎ労働の延長線上にある移動なのではないだろうか，と考えた．そのために長い期間を都市で過ごしたとしても，農村に帰るという出稼ぎの最終的な形態が残っているのかもしれない．

では，人はなぜその場所に戻るのだろうか．この疑問に小さな糸口を見出してくれたのは，都市での調査ではなく，私自身が都市で過ごしたことだった．

調査を始めて 1 週間ほど過ぎたとき，私は毎日シアボンガにいることに違和感を覚えるようになった．都市での暮らしや，都市に住む人々の価値観に触れることを楽しんでいたのは事実だったが，自分のいるべき場所ではないといった違和感だった．そして都市で出会った人々に，村の家族や友人たち，毎日の生活の話をしていると，その場所に住んでいたことをとても誇らしいと感じる自分に気

がついたのである．

私は以前日本でも，自分が高校や大学時代に地元から離れた場所に毎日通っていたとき，同じことを思ったことがある．自分の故郷を離れるにしたがって，その場所を客観的にみることができ，それまではわからなかった良さがみえてくる．そして元いた場所から離れる距離が遠くなるほど，自分が場所を見直す範囲は広くなっている．

出稼ぎ労働に行って村に戻ってきた人も同じようなことを感じなかっただろうか．故郷という，その中にいるときは無意識的な場所を意識化することが，村に帰るという行為に影響しているのではないだろうかと考えた．

そんな考えを巡らせながらも，調査は無事終了し，私はわくわくして村に戻った．すると，家までの道のりで私に気づいたたくさんの友人が，「どこに行っていたのだ？」「帰ってこないかと思った．」などと挨拶にかけよってきた．彼らとも話したかったが，まず家族に帰ってきたことを知らせたかった私は，挨拶も早々にして家路を急いだ．私が家の敷地内に入ろうとした瞬間，ナナが私に気づき，「Chihiro!!」と叫んでかけよってきた．私は一瞬なぜか涙が出そうになったが，ナナとその後ろにいた家族を見てほっとした．

人が空間に愛着を感じ，帰るべき場所だと感じるのには，人，そして人との関係がひとつの要素になっているように思える．私にとってはナナやギレとの遊びの中で，家族と毎日を過ごす中で，インタビューをして村の人と関わる中で築いてきた人との関係だ．これはなにもアフリカに限ったことではない．日本でもどこにいてもそうなのだと思う．ただその関係を築けるか，それに気づくことができるかの違いだ．

普段から何気ないけれど緊密な社会関係の中で築かれている彼らの故郷は，私にとっても「故郷」になるのだろうか．また，彼らにとっても私がその場所をつくっている一員として思われたいと願い，またフィールドへと向かうのである．